



CONTENTS

会長交代	渡辺一良・永田 啓	2
私の研究から	鈴木幹男・塩入俊樹・片岡英幸・塚村篤史	6
地域の病院に想う	久貝忠男・仲 成幸	12
開業苦労ばなし	内田 直・田中公孝	16
私の仕事場	山崎哲也・桐ヶ谷大淳・三澤美和・鈴木瑞穂	18
著書の紹介	田中正樹	22
支部会 関東支部	前田士郎・大橋俊子・中川晋一 坂井有里枝・熱田桃佳・常津裕一	24
滋賀支部	北村 拓・井上愛美	26
同期会 守山会(医1期)		26
西医体	バドミントン部・女子テニス部・サッカー部・空手道部・男子バスケットボール部 端艇部・ヨット部・女子バレーボール部・陸上部・水泳部・合気道部	27
広報担当就任	寺島智也・森野勝太郎	30
訃報		30
事務局から	総会議事録 ほか	40

湖医会会長交代にあたり



滋賀医科大学同窓会「湖医会」前会長
渡辺 一良 (医2期)

長寿全国No.1に貢献する 滋賀医大パワー

このたび湖医会会長を退くにあたり、ご挨拶を申し上げたいと思います。

本学は湖国滋賀県の医療水準を高めてほしいという県民の熱き希いと、一県一医大政策に基づき、昭和49年(1974年)に開学の運びとなりました。当時は旭川医大、浜松医大等とともに新設医大と呼ばれたのですが昭和56年、第1期生が卒業して以来、まもなく大学創立50周年を迎えようとしています。この間に医学科3,641名、看護学科1,374名の卒業生を輩出し、そのおよそ1/3は滋賀県に根を張って湖国の医療を支え、またある者は国内国外に羽ば

たいて医学、看護学の研究・教育・臨床に力を注いできています。

同窓会「湖医会」はそんな卒業生がいつでも連絡を取り合いお互いの力になれるように、また先輩から後輩への支援もできるようにとの考えのもと、会員の縦横を緩く束ねつつ、手探り、手弁当で歩んできました。手探りと申しますのは…約30年前といえば新研修制度施行前で、研修医となれば毎日病院に泊り込むような暮らしが続いたものです。卒業生が出てからの数年間は、全ての湖医会会員がそのように忙しい盛りでした。当然、湖医会を支えるような余裕は

誰にもなく、各卒年の会員情報すら把握できない状況でした。これを憂いたのが当時の佐野晴洋学長(故人)で、金子均(7期、現副会長)を通じて中島滋美(2期、前会長)と私を含む数名に呼びかけ、会の蘇生を図ろうということになったのでした。

中島は会長職を引き受け、かなりの労力を注ぎ込んで湖医会の再生を開始しました。永田(2期)、埜田(3期)、相見(5期)、黒川(6期)、金子(7期)、乾(8期)、茶野(10期)、田中(16期)などの諸君が、これまた手弁当で会長をサポートしました。こうした活動により佐野学長の理解を得て、学内に「湖医会事務局」を確保することができることになりました。中島はそこへ専属の事務職員を配置しました。彼女達はとても活発で、事務作業はもちろん、ときには学生の相談窓口になり、ときには湖医会の活動アイデアを捻り出し、そして湖医会主催の卒業祝賀会が迫ってくれば会場の紅白の幕張り作業までこなしてくれました。現在では新たに奥野正元大学職員がその豊富な事務経験を活かして、湖医会を裏から支えてくれています。こうして湖医会は多岐にわたる事業を維持、拡大しながら今日まで継続してこられたというわけなのです。

さて、暫くすると中島会長が米国留学(ピロリ菌研究)に旅立つこととなり、同期の私が会長代行を勤めたのが運の尽き、爾来26年間にわたる会長業(行)が続くことになったのでした。

この間を振り返るとじつは様々なことがありました。関東会をはじめ、鹿児島、大阪、奈良の各地に、そしてお膝元である滋賀にも湖医会の支部組織が草の根的に立ち上がりました。本学卒業生が各地で再び集える組織ができたということは、卒業生はもちろん、後輩

にとっても大変貴重なことでした。

教育、福祉・医療そして研究の各分野で地道に努力し、その業績顕著な卒業生を顕彰し称える湖医会賞、これは小澤和惠学長からそのアイデアをいただき、創設したものです。その選考、審査にあたっては、本学名誉教授の先生方にも審査委員に加わっていただき、熱心に議論しながら審査を行いました。毎年の選考会議に出るたびに、「我らが同門にこんな素晴らしい活動をしている会員がいるのか」と驚くばかりでした。誇らしい思いと同時に、我が身を振り返る良き反省の機会でもありました。

湖医会も年々成長してきたことから、大学では湖医会を重視する方向性が採用され、とくに吉川隆一学長の代からは大学の各種会議に会長や副



会長が委員として参加を要請されるようになりました。たとえば本学の学外有識者会議、滋賀医学国際協力会、大学の法人化以降では経営協議会、学長選考会議、等々です。これらの会議に出席する際には、大学の真の発

展のために、そして学内会員(教員、学生)の処遇改善や充実した学生生活に繋がるように、という純粋な思いをもって参加し、発言してきたという自負があります。

脳外科医としての手術日程を調整しつつ複数の会議に出席するという事はなかなか大変でしたが、役得もありました。それは代々の学長、副学長をはじめ錚々たる外部委員の方々…元銀行頭取、元県副知事、元学長、元商工会議所女性会会長など、通常ではなかなか懇意になりにくい“きわめびと”の方々とお付き合いをさせていただいたことです。自分にとってはとても大きな財産となりました。

2年に一度の湖医会役員の改選にあたっては、当然その都度、新会長候補を募ってきました。卒後10~15年目くらいになると学内会員も講師、助教授(当時の呼称)に昇進し、成長の芽を出してきていました。彼らにはしかし、働き盛りで多忙であることに加えて、ときには大学と対立する可能性もあった湖医会の幹部には名を連ねにくいという微妙な側面もありました。そんな事情もあって、開学50周年が目前となった今日までの長きにわたり会長を続けることになったという次第です。

開学50周年に至るこの節目を大事に考えて、同窓会館、あるいは学生のクラ

ブハウスなど記念建造物を建てようという動議も提案されました。湖医会員、学生、そして教員・職員のためになり、かつ大学の象徴となるような求心力のある記念碑的な計画が求められ、これを実現するにはひろく賛同される理念と、資金集めが重要です。そのためには誰もが認める妥当な発起人が必要でした。学内に眼を転ずると既に本学出身の教授が18名も誕生していました。この中から学長補佐職にあり、押しも押されぬ(?)立場にあった永田啓教授(2期生)が重い腰を上げてくれ、昨秋の総会に於いてようやく新会長として選出される運びとなりました。もちろん50周年記念行事に向けた動きばかりではありません。26年間の悪弊(?)はこれを払拭し、新たな息吹とともに「湖医会」運営を目指すべく、既に新体制が動き始めています。これからは永田新会長のものと、同窓会としての新たなページを開くために皆さんとともに歩んでいきたいと思っています。

滋賀医大パワーはその総合力でもって、**湖国滋賀の男性長寿全国No.1**に貢献してきたと言えるのではないかと…冒頭に掲げた新聞の見出しを見ながら、来し方を振り返りつつ、そんな感慨にふけたのでした。

滋賀医大よ、永遠なれ!

(文中一部敬称略)





会長に就任しました

渡辺会長が20余年にわたって頑張っておられた後をうけて、湖医会の会長に就任しました。

私には82人の先輩と、91人の同級生、そして看護学科を含めて4,842人の後輩がいます。

滋賀医科大学も、昭和49年(1974年)にスタートして以来40年を超え、2024年には開学50周年を迎えることとなります。

これまで、同窓会「湖医会」は、会員の親睦を図ったり、同期が10年毎に集まって親交を深める同期会をマネジメントしたり、奨学金が必要だけれど国や大学が出す要件に当てはまらない人に援助したり、大学の情報や同窓生の情報を湖都通信やメールマガジン・ホームページなどを使って皆さんに伝えたりといった活動を行ってきました。湖医会をスタートして、当初は会員も役員も若く、自分の事で精一杯な時期が続いたため、無理のない形で運営してきました。

こうした中で時は流れ、気がつけば1期生で最も若い現役生がもう60歳を超える時期になってきました。まさに時間は飛ぶように過ぎている感じがします。湖医会の構成メンバーも、さまざまな大学の教授や准教授になったり、病院長や副病院長をつとめたり、自分の城を築いた方々も多くなってきました。大学からも「もの言う同窓会」として滋賀医科大学により積極的にかかわってほしい、という要望も出てきています。

私の役割は、湖医会にメンバーがたくさんかかわって

い、自由闊達に意見を言い合える機会を増やしていったり、大学に対して物言う同窓会になれるように、組織や年間行事などを見直して行って、体制を整えてゆくことと思っています。

湖医会では、滋賀支部会・湖医会教授懇談会・湖医会病院長会議など、みんなで集まっているいろんな話をざっくばらんにできる会を増やしてきました。それぞれお互いの立場や現状を理解したり、意見を言い合ったりできる環境が少しずつ整ってきています。

湖医会の構成員はとても忙しく、多くの時間を湖医会の活動に割くことは難しいため、湖医会の中に総務・組織・渉外・広報・財務・行事企画・学生支援・学術研究・看護といった部門を作って、少しずつ時間をとってもらい、常任幹事に分担して活動してもらおうと考えています。また、皆さんが参加できる総会をめざして、今まで若鮎祭の時期に行っていた総会を8月の滋賀支部会の時に行うなど、いろいろと試行錯誤しながら行ってゆき、やってみながら修正するという形で、少しずつ体制を整備して行きたいと思っています。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

湖医会をにぎやかに、学生時代の気楽さを。



滋賀医科大学同窓会「湖医会」会長

永田 啓 (医2期)
(なかがた さとる)



新役員 任期:3年 (2017.11.1~2020.10.31)

- ◇会 長……………永田 啓 (医2期)
- ◇副 会 長…………… 蔦本 尚慶 (医2期)
- 相見 良成 (医5期)
- 金子 均 (医7期)
- ◇常任幹事……………中島 滋美 (医2期)
- 小島 秀人 (医3期)
- 埜田 和史 (医3期)
- 木築野百合 (医5期)
- 茶野 徳宏 (医10期)
- 北川 裕利 (医11期)
- 松村 一弘 (医11期)
- ◇監 事……………来見 良誠 (医1期)
- 向所 賢一 (医14期)
- 藤原 睦子 (医14期)
- 田中 裕之 (医16期)
- 寺島 智也 (医16期)
- 森野勝太郎 (医16期)
- 吉川 浩平 (医16期)
- 津田 知子 (看1期)
- 山下 敬 (看5期)

私の研究から

千里の道も一歩から



琉球大学大学院医学研究科
耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座
教授 鈴木 幹男 (医6期)

湖医会の皆様におかれましてはますますご健勝のことと存じます。私は大津市瀬田の出身で、子供のころ昆虫採集に来ていた場所に新しくできた滋賀医大へ入学しました。医学部6期生ですので、やっとすべての学年が揃った時期になります。教員の先生方から、新しい大学をつくるぞという気概を感じたのを覚えています。学生時代は柔道部を創部しました。当初部員数は少なかったのですが、後輩たちが西医大で活躍しているのを聞くと細々でも継続してよかったと感じています。

さて、私の研究からというテーマですので、これまで行ってきた研究を振り返りたいと思います。滋賀医大を卒業後2年目から大学院へ進みました。当時の耳鼻咽喉科教授の北原正章先生から、'気圧変化の内耳機能に及ぼす影響'を調べるようにテーマをいただきました。これはメニエール病では気象(低気圧)により発作が誘発されること、ヨーロッパで気圧チャンバーをメニエール病治療に用いる試みが開始されたことに伴う研究でした。入局当時の耳鼻咽喉科は齋藤春雄助教授、竹田泰三講師が高知医大へ栄転された直後でした。竹田先生から北野博也助手(鳥取大学前教授)が電気生理の手ほどきを受けられており、私は北野先生と回転刺激、音響刺激を与え、前庭神経、蝸牛神経から細胞外電位を記録する日々が続きました。小動物(モルモット)を用いていたため手技が難しく、実験を繰り返すことの大切さを学びました。学位を取得後、内耳免疫研究で知られるテネシー大学TJ Yoo先生の元へ留学し、自己免疫性内耳疾患の解明に取り組みました。帰学後は、北嶋和智先生が教授に昇任されたこともあり、北野先生と共に、木村 宏・遠山育夫両先生にご指導を受けながら内耳液代謝に関与する神経ペプチドの同

定と神経ペプチドによる内耳機能調節機構について分子生物学的手法を用いてバソプレッシン、ナトリウム利尿ペプチド、VIP、プロラクチン、オキシトシンなどの受容体や病態での変化を明らかにして行きました。また第1解剖(前田教室)で、免疫電顕も勉強させていただきました。さらに滋賀医大の特徴であるMRIを用いた脳機能画像を脳神経外科、放射線科、眼科と共同で、嚥下運動、聴覚・前庭覚の中枢神経系での情報処理、突発性難聴発症時の脳活動変化など多くの研究を行うことができました。この当時の研究は既に15年以上経過しましたが、パイオニアとして今でも論文に引用されています。

2005年4月に九州大学へ転籍した後、2006年2月に琉球大学耳鼻咽喉・頭頸部外科教授として赴任しました。当時の教室は学位取得者は私のみという状態で、研究室は物置となっていました。放置されていた器械を使用できる物とできない物に分けることが最初の仕事になりました。教室の全手術の90%以上で手術指導をする中で、琉球大学で何を行うべきかを考え続けました。沖縄は島嶼環境にあります。関西、東京など僅かの距離に多くの特徴のある大学病院があるわけではなく、私たちには沖縄県内で全ての分野で高度医療を提供する義務が課せられています。そこで若手医師を全国に派遣し、手術の勉強をしていただき、弱点分野の克服、得意分野の飛躍を試みました。研究は一時期完全にストップしましたが、その代わり臨床面では研修後帰学した先生が増え、バランスのとれた教室構成になってゆきました。また臨床を積む中で、沖縄県では頭頸部癌が本土の1.5倍以上の罹患率があること、特徴的な遺伝性難聴があることに気づき、教室の主たる研究テーマを頭頸部癌と遺伝子性難聴に据えました。

[1]

[略歴]

- 1986年…滋賀医科大学研修医(耳鼻咽喉科)
- 1995年…米国テネシー州立大学医学部免疫アレルギー科 research fellow
- 1996年…滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科 助手
- 1999年…滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科 講師
- 2005年…福岡記念病院耳鼻咽喉科部長
- 2006年…琉球大学医学部高次機能医科学講座耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野教授
- 2010年…琉球大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座教授(改組)
- 2012年…琉球大学医学部附属病院病院長補佐兼任(2013年3月まで)
- 2013年…琉球大学医学部副医学部長兼任(2015年3月まで)
- 2015年…琉球大学医学部附属病院副病院長兼任 現在に至る

両者はそれまで行ってきた研究とは随分異なる内容ですが、頭頸部癌におけるヒト乳頭腫ウイルス感染の役割・癌化へのメカニズム、抗がん剤の薬剤耐性機序、新規難聴遺伝子の発見など多くの業績を出せるようになってきました。また3T MRIが導入され、念願の脳機能研究を再開しています。そして徐々にですが臨床、研究の両面で学会誌の最優秀論文賞、学会賞、国際・国内学会のシンポジスト、手術手技の特別講師などを教室から出せるようになってきました。2017年には、2nd Congress of Asia-Pacific Society of Thyroid Surgeryという国際学会を那覇市で開催しました。海外から300名以上の研究者が参加し、国内を加えると500名以上の参加者があり実りある学会となりました。いずれも私がというよりも教室員が努力してくれた結果ですが、赴任当時を思い出すと千里の道も一歩からという言葉が一番当てはまると思います。北原正章・北嶋和智両恩師、大事な局面でお力添えをいただいた諸先生方からの教えが今につながっていると感じます。まだ現時

点は千里にはほど遠い位置にありますが、オリジナリティのある研究、臨床に生かせる研究をモットーに教室員とともに歩んでゆきたいと願っています。

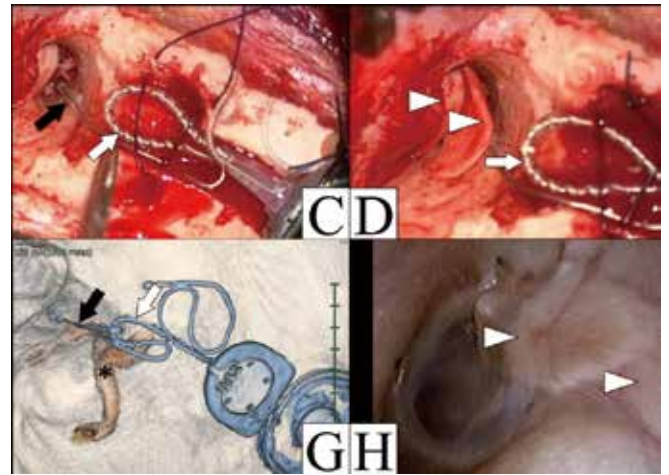


写真1：新規変異(CHD7)を同定したCHARGE症候群。中内耳奇形があり、新たに考案した人工内耳手術で良好な聴覚を獲得できた(Otol Neurotol 2017, 一部改変)。



写真2：APTS学会のGala Dinner(2017年11月、那覇市、ロワジールホテル那覇)。

私の研究から

「私の今」旧山古志村の心のケア活動



岐阜大学 大学院医学系研究科精神病理学分野
教授 塩入 俊樹 (医7期)

今年の8月下旬、「湖医会」事務局の方から突然メールをいただき、「貴誌に原稿を」とのこと。さらに、「同期の横浜南共済病院整形外科部長三原久範先生からの推薦」「テーマは何でもいい」「具体的な感じは、9月の初旬に出る湖都通信(79号)を確認」ということでした。

昨日、待ちに待った(?)湖都通信が届きました。いつになく真剣に読みますと、同期や知り合いの方々が沢山載っていて、とても懐かしく思いました。まず、「編集局より」で同期の金子均先生。「私の研究から」は前述の三原久範先生と精神科で1年先輩であった名古屋大学の入谷修司先生。「新聞記事にみる」では私の助手時代にポリクリ学生だった精神科医の荻田謙治先生、同じく精神科医の神出誠一郎先生は「卒後20周年同期会」の記事を書かれています。最も驚いたのが、同期の今村武史先生の「教授就任」です(先生、すいません!)。鳥取大学に教授として招聘されたことよりも(とても優秀な方なので、“いつかは必ず”と信じておりましたので)、学生時代、誠実で真面目、勉強熱心な今村先生が“俗界の真っ只中”におられるとのこと!実は学生時代、三原先生達と合コンに明け暮れていた私は、今村先生とはお互いに挨拶をする程度の仲でした(たぶん)。それが卒後10年が経ち、日本から何千キロも離れた米国サンディエゴで偶然再会するわけで、人生とは本当にわからないものです。同時期、



右端が今村先生、左端が筆者

[2]

現長浜赤十字病院副院長江川克哉先生も第3内科から今村先生と同じラボに留学されており、3家族での楽しい日々は、とても楽しい、忘れがたい素晴らしい思い出です。そんな夢のような生活は3年程で終わり、私は早々に日本に戻ってしまうのですが、今村先生はその後10年以上、彼の地で正式に職を得て、糖尿病に関する最先端の研究に日々心血を注ぎ、邁進し続けておられました。ですから、「あの今村仙人が“俗界の真っ只中”!?’と驚いたのでした。今村先生、本当に、おめでとうございます!

さて、本題に入りましょう。2005年、私は、「新潟県中越地震のこころのケア活動」に対して栄えある第4回湖医会賞「臨床・福祉領域」を頂きました。ですから、会員通信である貴誌で、その後12年間の活動についてお話しするのが私の義務だと思います。

周知のごとく、2004年10月23日、午後5時56分、M6.8強、最大震度7の地震が、新潟県中越地方で起こりました。実は、我が国で被災者の方々の「心のケア」がきちんとされたのはこの時が初めてでした。「心のケア活動」には、急性期の活動と中・長期的活動の2つがあります。時期的には、前者は災害直後から数か月ほど(被災者の方々が避難所から仮設住宅に移られるまで)、後者はそれから以降、となります。ですから、湖医会賞は急性期の「心のケア活動」に対してでしたが、「その後の活動に

期待します」との要望も頂きました。私はその後も、仮設住宅が閉鎖され、被災者の方々が地元に戻られるまでの約3年間(中期「心のケア活動」)、そしてさらに長期「心のケア」としてその後も約10年余り活動しております。岐阜に赴任して9年余りになりますが、今も、年数回ですが旧山古志村の皆様に出会って行っております。なお、その間に、今でも忘れられない2011年3月11日の“東日本大震災”がありました。新潟での経験のあった私には東北大学から直接依頼があり、主催教室総出で石巻での急性期「心のケア活動」に従事しました。よく、「先生は岐阜に行って何年も経つのに、どうしてまだ山古志なのですか?」と尋ねられます。それは、「この日本の原風景とも言える山間地に起こった大災害によって人々の心がどのようになり、どのように回復し、どのように変わっていくのかを知っている専門家が、私しかいない」からです。私も大学人の端くれですが、この活動は研究のためではなく(論文1つ書いておりません)、言わば、私の「ライフワーク」、「定め」だと思っております。ですから、ずっと見続けていく、関わり続けていきたいのです。いや、かっこを付けすぎました。きっと、自分が山古志に癒されに行くのだと思います。長期の「心のケア」とは、ケアをする者、される者の垣根がなくなる作業なのかもしれません。



私の研究から

[3]

波のまにまに



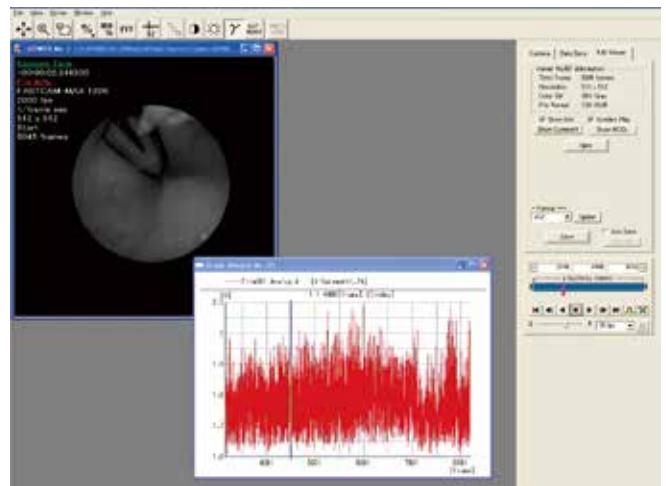
鳥取大学医学部保健学科 成人・老人看護学
教授 片岡 英幸 (医9期)

湖医会の皆様、医9期生の片岡英幸と申します。卒後は滋賀医科大学耳鼻咽喉科学教室に入局し、平成14年鳥取大学医学部感覚運動医学講座耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野に転任、平成24年からは鳥取大学医学部保健学科成人・老人看護学講座に異動し現在に至ります。これまで臨床・研究は、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域、特に頭頸部がん、甲状腺、音声言語、摂食嚥下、睡眠障害などに取り組み、保健学科では、さらに、がん看護、糖尿病看護、手術看護、救命救急看護など様々な領域の学生指導に関わってきました。

このたび、湖都通信「私の研究」というタイトルでご指名いただきましたので、滋賀医科大学在職中からずっと続けてきている音声の研究を紹介したいと思います。北嶋和智教授の指導の下、音声の発声機構や調節機構について空気力学的アプローチによる研究テーマをいただき、「音声基本周波数における声門上下圧差の影響ーゴム膜モデルによる実験ー」という表題で学位を取得しました。耳鼻咽喉科の音声グループでは、成犬での吹鳴実験やヒトでの発声時の生体信号計測を行っていました。



測定機器検定



声帯振動と流速波形解析

鳥取大学は県東部の湖山キャンパス(鳥取市)と県西部の米子キャンパス(米子市)がある総合大学です。医工連携の推進から湖山にある工学部と音声についての共同研究を実施する機会に恵まれ新たな成果も生まれております。例えば、声帯周辺の生体信号を計測するための小型計測機器の共同開発を行い、経鼻的に挿入する医療用軟性喉頭ファイバーの鉗子用チャンネルの先端で生体信号を検出しています。これまで超小型流速センサー、プローブ型マイクロフォン、ハイスピードカメラ用極細径の光源等を開発してきました。センサーの大きさ、光量不足などの理由から軟性喉頭ファイバー下にハイスピードカメラを用いて声帯振動の観察や生体信号を測定することは困難でしたが、診療に用いられている喉頭ファイバースコープ検査と同等の手技で、声門直上での呼気流速、圧力変動の測定及び波形解析が実施可能となりました。これらの基礎実験で得られたデータをもとに、より効率的な音声訓練法の解明へと展開していきたいと考えています。

最後になりましたが、滋賀医科大学でお世話になった諸先生方、諸先輩方に感謝申し上げるとともに、湖医会の皆様のご多幸とご活躍をお祈り申し上げます。

私の研究から

[4]

「旅行医学」のすすめ



国立成育医療研究センター
内分泌・代謝科 塚村 篤史 (医26期)

湖医会の皆様、大変お世話になっております。医学科26期生の塚村篤史と申します。

今日は、私が趣味で始めた『旅行医学』『渡航医学』『トラベルメディスン』(以下、「旅行医学」と記載します)と言われる分野の紹介をしたいと思います。

私が以前に勤めていた病院の近くに某有名企業があったことから、「海外在住ですが、一時帰国時の子どもの健康診断をしてください。」「来春から夫の転勤に伴って〇〇(国名)に行くことになりました。渡航に際して子どもの予防接種はどうすればよいですか。基礎疾患についての診断書を書いてください。」「先月、〇〇(国名)から帰ってきました。今後の子どもの予防接種のスケジュールを立ててください。」などといった依頼を受けることが多くあり、勉強を始めたことがきっかけでした。

その後、この「旅行医学」と言われる分野が非常に幅広く奥深いことを知り、自身では海外どころか国内でもあまり旅行することのない私ですが、一般社団法人日本旅行医学会認定医、一般社団法人日本渡航医学会認定医療職、といった資格を取得するまでに至り、この分野の面白さにはまっています。

もともと「旅行医学」は、海外への転勤・旅行に伴うことのみならず、人の移動を安全・快適にす



るための医学とされています。たとえば、冒頭に挙げたような出発前や帰国後に関することから、海外の医療事情や感染症対策について、持病がありケアが必要な旅行者への対応、航空医療搬送、飛行機の中の医学(航空医学)、海洋レジャーに伴う医学(海洋医学・潜水医学)、高地での活動に伴う医学(登山医学)、そして、宇宙旅行に伴う医学(宇宙医学)に至るまで、非常に多岐にわたっています。

例えば、先生方が普段みておられる、高血圧や心臓病、呼吸器疾患、貧血、糖尿病、てんかんや精神疾患、などを有する患者さんが、長時間飛行機に乗って海外旅行に行きたい、高地トレッキングやスキューバダイビングをしたい、とおっしゃった場合、医師として正しくアドバイスをすることができるでしょうか。心筋梗塞や脳梗塞、深部静脈血栓症の発症後、各種外科手術(開頭・開胸・開腹・眼内)後、いったい何日間までは飛行機に搭乗できない絶対条件として定められているか、などご存知でしょうか。

今後、地球温暖化により、日本でも熱帯医学が必要に

なると言われており、また、人の移動がさらに複雑化していくであろう現代社会において、医師としての興味をくすぐられませんか。



地域の病院に想う

へき地より医師不足を思う



沖縄県立北部病院

副院長 久貝 忠男 (医6期)



平成29年4月から、住み慣れた那覇市を離れ、沖縄本島北部の名護市にある県立北部病院(327床)の副院長として赴任した。那覇市も東京や京阪神からしたら、“田舎”になるが、名護市は那覇市からすると沖縄本島北部の“へき地”にあたる。北部地域は沖縄本島の2/3の広域を占めるも、人口は12万と人口密度は低く、中核の名護市には6万2千人が住んでいる。北部は東洋一と称される美ら海(ちゅらうみ)水族館や絶滅危惧種のヤンバルクイナを代表とする固有性の高い動植物が生息する地域で、地元では「やんばる(山原)」と称されており、奄美、西表島とともに世界自然遺産登録を目指している。と聞こえはいいが、日々、マスコミを販わす辺野古(へのこ)基地も名護市にあり、自然と文明が衝突する話題に事欠かない所である。しかし、北部病院の最大の問題は基地でも、世界遺産でもない。医師不足である。へき地、離島の医師不足は社会問題であり、それを管理者として痛感している。心臓外科医として、好きな手術を全うしたいと思っていたが、雲行きは怪しい。

医師不足が深刻な都道府県へ配慮して、2008年度から地域枠などの定員増が始まり、2016年度には35年ぶりに医学部が新設されるなど医学部定員は増加し、これまでの7625人から過去最多の9262人に増加した。医師の定員を増やしていけばコップの水がこぼれ落ちるようにトリクルダウンで地域に勤務する医師が増加し、医師不足は解消するはずであったが、増加した医師はやはり都会に萍のように溜まっている。現状では、定員増による効果はまだ出ていない。

いったい、医師のへき地、地方勤務を妨げている要因は何であろうか?厚生労働省の平成28年の調査による

①

と、医師の44%は地方勤務の意思があると回答している。特に20代では60%、30代では52%と若手医師の半数以上を占めている。また、研修医へのアンケートでも、58.4%が「条件が合えば従事したい」と回答している。若い医師

の半数以上が地方勤務を嫌がってはいない。では、その条件とは何か？20代では希望する内容の仕事ができない、専門医の取得に不安がある。30代および40代では、子どもの教育環境が整っていない、家族の理



解が得られない、希望する内容の仕事ができないことが上位にランクする。専門医取得などスキルアップを気にする20代と子どもや家庭といった生活環境が理由とする30代、40代と違いがある。50代以上では、開業準備や労働環境の不安をあげ、子どもの教育が理由となる場合は少ない。全年代を通じて共通しているのは希望する内容の仕事ができないこと、子どもの教育環境などの不安をあげている。すなわち、地域、へき地勤務に興味はあるが、条件が整っていないので行きたくないというのが本音だろう。「地方は不利だからこそ努力し、執念を燃やせ！一肌脱げ！」とエールを送りたいが、医師にも生活があり、「赤ひげ」精神では成り立たない現実がある。最も頼りとする働き盛りの30～40代の常勤医の引き留めには、教育と医療は切り離せない。

ならばと、へき地、離島義務を課す地域枠が沖縄県にもある。しかし、期間は1年。義務を果たせば、スキルアップを求めて北部を去り、沖縄を去り、都会へ向かう。若い医師の退職は24時間365日体制での救急医療の維持を困難とし、県立病院の使命を果たせずに、休止に追い込

まれそうである。その地域枠制度さえも2019年度には期限切れを迎えるらしい。

当院では十分な常勤医師の確保は難しいことから、医療の質を確保しつつ、医師の負担軽減が図られるような、

休日、土日の当直応援体制を組むなど環境づくりに努めているが、医師不足は次の離職者を生み、労働環境は厳しさを増すばかりである。さらに、2018年度からの新専門医制度は地域医療に不利と言われており、今から

戦々恐々としている。

我が国の医療にとっては重要なことは現場で働く医師の数であって、医学部の定員数ではない。確かに、国際的には、日本はまだ医師不足で、国際水準に比べ、人口千人当たり医師数は3割少ない。しかし、増やすだけでなく診療や地域偏在の解消のために専門医の制限や地方への誘導など、欧米にあって、日本にない数々の制度の違いを日本流にアレンジして取り組まないと意味がない。熱い志をもって医学部を卒業したものの、医師自身の気持ちも態度も振り子のように揺れ動いている。医師は自由にどこでも、どんな診療活動しても構わない日本の制度を逆手にとり、地方勤務のインセンティブとして短期間で専門医が取れる、国から高給の割り増しを与えるなどが最も強制感がなく、効果的と思われる。都会と同じではない勝ち目はない。つまり、地方勤務の経験に何らかの評価する仕組みを国策として行えば、地方に誘導できるのではないだろうか？医師数の増加ではなく、地域偏在、診療間偏在を是正してこそ津々浦々、国民皆保険と国民皆医療を享受できると考えている。

地域の病院に想う

東近江における 地域医療への取り組み



医療法人社団 日野記念病院
院長代行 仲 成幸 (医10期)

滋賀県が男性の平均寿命日本一になったことが平成29年12月に発表された「平成27年分都道府県別生命表」(厚生労働省)で明らかとなりました。また、東京大学が1990年と2015年のデータを使って解析したところ、死亡率の減少率、そして健康寿命も滋賀県が一番でした。東大の解析でも明らかな理由は不明ですが、新聞や週刊誌では鮎ずしの乳酸菌が良い、淡水魚を沢山食べる、近江牛が美味しくて肉食文化である、「むべ」というアケビ科の不老長寿の実がある、喫煙率が全国最低、高齢者ボランティア活動者比率一位、スポーツ活動時間一位等々、何となく納得できる事から滋賀県民でも初めて聞くようなものまで紹介されています。滋賀県は琵琶湖を中心に自然に恵まれ、美味しい食べ物も沢山あり、東海道、中山道、北陸道が交わり利便性も良く暮らしやすい所だと思います。また、「近江商人」が全国で商いをする事により多くの情報が集まり、進取の気性に富む風土が作られたことも影響していると考えられます。さらに、地域医療を良くする取り組みの一つとして、東近江地域の「三方よし研究会」があります。「患者よし、医療機関よし、地域よし」を標語とする医療と福祉関係の多職種からなる勉強会で、草の根からの地域医療作りが高く評価されています。

日野記念病院は昭和60年に日野町の誘致により開設され、22診療科、常勤医師29人を擁する150床の病院です。東近江保健医療圏(日野町、竜王町、東近江市、近江八幡市)で地域に密着した医療のみならず質の



高い専門医療も提供出来るよう日夜努力しています。外科は花澤一芳院長、仲成幸院長代行、迫裕孝院長代行、東田宏明副院長、児玉泰一医長が消化器外科・一般外科においてそれぞれの役割を担当しています。胃がん、大腸がんに対してはほとんどの症例で腹腔鏡下手術を施行しており、進行胃癌に対しては腹腔内温熱化学療法(HIPEC)も施行しています。また、肝切除や膵切除などの肝胆膵症例にも力を入れています。最近では、乳癌手術および甲状腺の手術症例が増加しています。

日野記念病院がある東近江保健医療圏は、滋賀県内の7つの2次保健医療圏の中では大津、湖南に次ぐ人口23万人、面積が湖北に次いで広く琵琶湖から鈴鹿山脈に至る範囲をカバーしています。少子高齢化が進んでいますが高齢者が可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるように地域包括ケアシステム(住まい・医療・介護・予防・生活支援)の構築が進められています。勿論、地域における質の高い急性期医療も必要不可欠なものとなっています。このような状況の中で、増え続ける社会保障費を抑制するためにさらに効率的な医療の提供も求められています。そこで、医療法人社団昴会では日野記念病院、湖東記念病院、能登川病院の3病院(合計381床)で各々の特徴を活かしながら連携することで、効率的で質の高い医療を地域に提供出来るよう取り組んでいます。高度専門医療への取り組みとしては日野記念病院に滋賀脊椎センター、昴会消化器セ

ンター、湖東記念病院に心臓血管センター、脳神経外科センター、滋賀ガンマナイフセンターを設けています。「手術数でわかるいい病院2017」(朝日新聞出版)によれば、脊椎の手術件数は県内最多で全国ランキングにも入っています。また、心臓カテーテル治療件数は県内で最も多く、心臓手術、脳腫瘍に対する手術と脳動脈瘤治療件数もそれぞれ県内トップクラスで近畿でも有数の症例数となっています。昨年開設された「昴会消化器センター」は3病院で横断的に協力してあらゆる消化器疾患を専門体制で受け入れることを目的としています。診断から治療に至るまで、消化器内科・消化器外科・放射線科・病理診断科・内視鏡センター・検診センターが対応し、患者さんだけでなく医師も各病院間で移動しながら診療にあたります。このように昴会では地域医療の担い手となる基盤を有した小回りの利く規模の病院が、各々特化した機能を持ちながら連携することにより、地域包括ケアシステムから急性期の専門医療まできめ細かく対応できる良質な医療を提供することを目指しています。

滋賀県は平均寿命、健康寿命で日本一になりましたが、県民一人当たりの医療費は全国で44位と最低ランクとなっています。「健康長寿で医者要らず」の滋賀県で「住民よし、自治体よし、医療機関よし」の「三方よし医療」の実現に取り組んで行きたいと思えます。



すなおクリニック 院長

内田 直 (医3期)

開業 苦勞 ばなし

還暦にして開業

私は1983年に滋賀医科大学を卒業しましたので、今年で卒業35年になります。大学卒業後は、すぐに東京医科歯科大学神経精神医学教室に入局し、その後精神病院・大学病院勤務などを経験して、アメリカへ行きました。そこでカリフォルニア大学の職員として2年研究をし、1992年から東京都精神医学総合研究所(都立松沢病院キャンパス内)にて研究員として、睡眠研究を行いました。その後、早稲田大学の教員になったのが、2003年のことで、それから14年あつという間に経ってしまいました。この間は、早稲田大学の活躍する多くのアスリートと接することができ、一緒に睡眠の研究もしてきました。また、それまでは研究所で生活していた人間が14年間スポーツ系の先生方と接していたので、随分と自分自身も変わったと思っています。

自分自身は、睡眠の分野ではありますが、精神科研究を長くやった上に、スポーツ科学の教育研究をやるというユニークな歩みができたと思っています。そこから学んだいちばん大切なことは、人の生活を24時間のトータルで考え、この中で運動、食事、睡眠を含めた生活から精神的にも身体的にも健康度を上げるということだと思います。これは、統合失調症、気分障害、不安障害、発達障害、認知症、依存症、どれをとっても重要さは変わらないことだと

と思っています。運動指導のできる精神科医は少ないと思いますが、自分自身はそういった意味でも他の精神科医とは異なったユニークな経験をしてきたと思います。

60歳になって、早稲田大学が選択定年制度を使えるようになり、今までの経験を臨床で活かしたいと思い、また、もう一つ違う人生も歩んでみたいと思って開業を決意しました。名前は、自分の名をとって「すなおクリニックスリープ・メンタルヘルス総合ケア」としました。場所は、埼玉県さいたま市大宮駅から徒歩3分ほどのところ。詳しくはHPを御覧ください。(http://sunao.clinic)

睡眠の問題は訴えやすい愁訴だと思います。不眠を訴えてくる患者さんの中には、うつ病を始めとして様々な患者さんがおられます。更には、過眠症の患者さんも多く来られます。当クリニックは、脳波・ポリグラフの設備も完備しており、MSLT検査という日中の眠気の診断も行っており、ナルコレプシーや特発性過眠症の患者さんもみえます。また、うつ病と睡眠時無呼吸症候群の合併は非常に多く、双方を専門的な視点で治療できるクリニックは必ずしもおおくないため、これも当クリニックの特徴の一つです。

還暦を過ぎ、人生最後の仕事として、動ける限りこの仕事をやっていきたいと思っています。





びあ訪問クリニック三鷹

田中 公孝 (医29期)

開業 **苦勞**
ばなし

超高齢社会の課題解決を目指し、 新しい形の在宅医療を提供していく

こんにちは。医学科29期生、田中公孝と申します。

この度、2017年4月に東京都三鷹市で訪問診療に特化した「びあ訪問クリニック三鷹」を開業しました。

私自身は、滋賀医大での実習・初期研修のなかで総合診療・家庭医療と出会い、これまで家庭医としてトレーニングを積んできました。そのなかで地域小病院や在宅支援診療所で寝たきりや誤嚥性肺炎を繰り返す方々を担当していくなかで、プレホスピタルや退院後のフォロー体制の面から超高齢社会の課題を痛感し、今回の訪問クリニック立ち上げに至ったという経緯です。

当院の診療の特徴は、日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医として全身を診るのはもちろん、本人・家族の希望と医学的方針を調整しながら診療方針を決定していくことです[海外では、SDM (Shared Decision Making) といって、日本語訳は「協働的意思決定」になります)。

加えて在宅医療で大事なものは、さまざまな専門職とのフラットなコミュニケーション。訪問看護、訪問薬局、介護事業所、後方支援病院といった方々と相談した上で、より良い方針を選択していく努力をしています。その甲斐もあって、開業からこれまで数名のお看取りをさせていただいています。

さらに今回、メドピア株式会社の石見陽先生との共同創業としてクリニックを立ち上げており、医師10万人会員の集合知を資産として医療ITとコラボレーションすることが可能な状況になっています。在宅医療にIT・テクノロジーを駆使することで、これまでにない現場ソリューションを目指していければと考えています。

一点、開業苦勞ばなしというタイトルですので、少しばかり経験を共有させていただきますと、開業後は人材の採用・マネジメント、資金繰り・キャッシュフローの意識、医師会や連携会などの対外的な活動といったさまざまなことが、日々の臨床に加えて押し寄せてきます。毎週のように経営課題に直面しますが、1つ1つ丁寧かつ迅速に解決していかなければ、後手後手になり、経営の悪化を招きかねません。これまでの人生で経営・マネジメントを学ぶ機会はそれほどありませんでしたが、先輩方に相談し、失敗を重ねながらもなんとか乗り越えている状況です。

長くなりましたが、病気や障害を抱えていても住み慣れた土地で暮らし続けられるよう、スタッフ一丸となって確かな在宅医療を提供していければと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。



私と横浜DeNAベイスターズ



横浜南共済病院スポーツ整形外科
山崎 哲也 (医7期)

私は、1987年に滋賀医科大学を卒業した七期生です。卒業直ぐに、横浜市立大学医学部の整形外科の門を叩き、関連病院の一つであった横浜市立港湾病院にて整形外科の研修を始めました。当時の港湾病院は、日本におけるスポーツ整形外科の草分けの一人である故高澤晴夫先生が院長をされており、当然のことながら整形外科分野の中でも、スポーツ関連の外傷、障害例が多く、なかでもラグビーやサッカー選手（高澤先生は早稲田大学ラグビー部およびASフリューゲルスのチーム・ドクターを長年されておりました）の治療に関しては、日本有数の症例数および技術を誇っておりました。その後、大学病院や他の関連病院にて研修後、スポーツ整形外科（特に肩、肘）を専門にしようと志していた時期の2000年に、現在の横浜南共済病院整形外科に赴任しました。当病院は、1984年、前院長であられた故山田勝久先生が、ベイスターズの前身である大洋ホエールズのチーム・ドクターに就任され、1996年には病院と横浜ベイスターズ（1993年大洋ホエールズから球団名変更）が正式に指定病院契約を結んでおりました。赴任時、私自身未熟なスポーツ整形外科医でしたが、早速、山田先生

から横浜ベイスターズの選手の診療を仰せつかり、必死に勉強させていただいたことを、昨日のように思い出されます。現在まで、多くのベイスターズ選手を診療させていただきましたが、特に印象に残っているのは大魔神こと佐々木主浩選手です。彼は1990年に横浜大洋ホエールズに入団し、その後メジャー・リーグを含め16年間プロ野球選手として活躍しましたが、現役期間中に計5回当院にて手術を施行しております。日米通算で381セーブという抑え投手として輝かしい成績を残しておりますが、その陰には、手術後の厳しいリハビリテーションを、それこそ血のにじむような努力で乗り切った彼の不屈の魂があったのです。

現在、当院ならびに私を含めたスポーツ整形外科の医師は、横浜DeNAベイスターズと正式にチーム・ド



ベイスターズ医療スタッフ

クター契約を結び、かつ横浜スタジアム内にある診療所の責任者および医師派遣の業務も務めております。私も医師は、春、秋のキャンプには数日間帯同し、横浜スタジアムでの試合では、可能な限りベンチ裏にあるトレーナー室で待機し、試合後に選手の診療を行っております。現オーナーである南場智子氏が、私の高校（新潟高校）の同窓生でもあり、また現監督のアレックス・ラミレス氏も現役時代診療させていただいたご縁から、選手以外のフロント方々やチーム・スタッフとも良好な関係が保たれていると自負しております。毎年『今年こそは』と思い、チーム・ドクターの仕事をさせていただいておりますが、なかなか思うようにいかないのが現状です。仕事はさておき一ベイスターズ・ファンとして、いつも今年こそは優勝!と願っておりますので、皆様も応援の程よろしく申し上げます。



地域医療の現場での経験を、 大学での教育へ



宮崎大学医学部 地域医療・総合診療医学講座
桐ヶ谷 大淳(医21期)

2001年に大学を卒業して、十数年が経ちました。卒業した頃は40歳前後の医師といえば雲の上の存在でしたが、自分も同じような歳になったかと思うと不思議な感じがします。どんな医師になりたいかなど大して考えることもなく学生生活を送っていましたが、大学6年生のときに診療所での外来や訪問診療を実習して、患者さんや住民の方々の健康に関するさまざまな相談にのれる町医者のような存在になりたいと思いました。滋賀医科大学総合診療部から初期研修を開始し、その後は山間へき地や離島などにある中小病院や診療所で研修や診療を行ってきました。一時期は滋賀に戻り、米原市にある地域包括ケアセンターいぶきや米原市国民健康保険近江診療所で働いていましたが、'Happy Wife, Happy Life'を目指して6年前に妻の実家のある宮崎県へ移住しました。移住後は滋賀で学んだ地域包括ケアや在宅医療に関するスキルをもとに、宮崎県日南市の公立病院で在宅医療部門の立ち上げや多職種連携への関わり、地域住民への啓発活動などに取り組んできました。今年度からは宮崎大学地域医療・総合診療医学講座を主として活動し、地域医療や総合診療に関する卒前・卒後教育、多職種連携教育などに力を注いでいます。

母校ではないものの久しぶりに大学で働くようになり、二十年近く前とは医学教育もずいぶん変わってきていることを実感しています。「多様なニーズに対応できる医師の養成」を目指して取りまとめられた平成28年度の改定医学教育モデル・コア・カリキュラムでは、医療をめぐる社会の変遷により、今まで以上に地域医療(地域完結・循環型医療)や地域包括ケアシステムを意識した内容になっています。そのような中で、自分が地域医療の現場で経験してきたことが、これからの医療を支える人材養成に少しでも役立つのではないかと思いながら暗中模索しています。滋賀で学んだ三方よしの精神も、宮崎で広めていきたいと思います。あまりキャリアプランも考えずに歩いてきて、将来もどこでどうしているか分かりませんが、卒後10年毎の同期会も楽しみにしながら一歩ずつがんばっていききたいと思います。



総合診療医を育てる



大阪医科大学附属病院総合診療科
大阪医科大学地域総合医療科学寄附講座

三澤 美和 (医25期)

「風邪だと思う人が受診したらどうやって風邪って診断してどんなホームケア説明する?」「え?風邪ですか?え〜と。」「風邪とか膀胱炎、認知症、心不全、喘息とか、腰痛、頭痛、糖尿病とか…どうやって診療するんか習ったことあるかな?」「ん〜確かにあんまりないです。」今日もワイワイと医局に5年生の臨床実習生との会話が広がります。

新専門医制度が発足し19番目の専門領域として「総合診療専門医」育成のプログラムが正式に動き出すことになりました。総合診療専門医はプライマリ・ケアを専門とし、「いつでも、どこでも、だれにでも、どんな健康問題にでも」適切に初期対応でき、必要時には臓器別専門医に迅速に紹介し連携させてもらうこと、「地域の健康」に目を向け取り組むことなどをコアな能力とします。

私は卒後11年間、長浜赤十字病院でお世話になり12年目の一昨年春、一大決心をして大阪医科大学附属病院総合診療科にうつりました。学生のときから「家庭医、総合診療医」に関心を持ち、当時の滋賀医科大学家庭医療講座にプログラムで長浜での小児科研修や弓削メディカルクリニックでの研修を積みさせていただきました。自分が修行を重ねてきたこの領域の理論と実践を後輩たちに伝えて育てることが自分の医師人生後半のミッションだと感じたことが大学医局への異動を決心した理由で

す。滋賀医科大学には1年生の早期から「地域」を意識した実習や講義がいろいろありましたが、今思えば贅沢な環境だったと思います。大阪医大はまだまだこれから医学教育の中でコモンな疾患や健康問題を総合的にみられるカリキュラムを作っていく必要があると感じています。ご両親の診療所を継承する学生さんも多いので、総合診療の世界を知ってもらいプライマリ・ケアの専門性を感じてもらうことがとても楽しいです。幅広い健康問題に対処し、疾患の背景にある「人」を診て、地域にも目をむける、そんな医師を育てていくことは将来の日本の医療を支えると思っています。

先日、同じ25期生で長浜で家庭医として活躍している松井善典先生を招き、大阪医大の学生たちが「家庭医ってなんだ?!」という勉強会を開きました。学生たちが立ち上げた勉強会に同窓生である友人を招けることはとても感慨深いものでした。まだまだ少数派で十分理解が得られないこともあります。ゆっくりこの領域の専門性が理解され、広がっていくといいなあと思っています。そして、人を育てることの楽しさを伝えていける仕事場でありたいと思います。

今回このような機会をいただき、この紙面のお手伝いできたことを大変光栄に思います。ありがとうございました。



産業医の魅力



株式会社みずほ産業医事務所
代表取締役 鈴木 瑞穂(医31期)

こんにちは。31期生の鈴木瑞穂と申します。

卒業後は自治医科大学付属病院で内科研修を終え放射線科を経たあと、2016年に起業してから現在に至るまで産業医活動を中心に行っております。

産業医とは何か?「会社の中のお医者さん?」そうご想像される先生方も多いのではないのでしょうか。

産業医とは、労働安全衛生法13条に定められる条文では「企業内にあって従業員の健康管理を行う医師のこと」ですが、これだけでは「会社の中のお医者さん」のイメージ範疇を超えないかと思えます。

もちろん健康診断の判定・事後措置など“それらしい”業務も行いますが、求められる職務は非常に多岐にわたっています。

職場巡視(有機溶剤・金属等の有害物～作業工程・姿勢など労働衛生工学)、安全衛生委員会への出席と助言、近年マスメディアでも大きく取り上げられている過重労働者やメンタルヘルス不調者の対応やその予防策の立案、休職・復職判定、労働災害防止に関する意見等々、どれも医学知識だけではとても賄いきれません。そこに産業医の多様性と魅力を感じ、また個人の人生の中で多くを占める就労期間の幅広い世代と長く関わり、サポートさせて頂くことにやり甲斐を覚えました。

最近のトピックでもある『働き方改革』推進のため、行政は今まさに産業医・産業保健機能の強化を建議しているところであり(労審発第922号、平成29年6月6日)、法整備の準備も進められています。確実に言えることは産業医の役割・権限強化に伴いそのやりがいが増える一方、負うべき責任も多くなることが想定されます。しかし問題解決・情報発信に必要なリソース等はまだまだ乏しい実業界でもあり、現在私は産業保健全般(産業医科大学 浜口教授ら率いる私塾)、法務や労働法(近畿大学法学部

三柴教授率いる私塾)、産業保健と臨床研究(自治医大市原教授率いる環境予防医学講座、現在社会人大学院1年生)と、各方面において経験豊かな師の元で勉強を続けています。探求するだけ新しい知見が得られる楽しい分野だと考えております。

臨床医の先生方には、休職・復職時に頂く診断書、就労に関するご意見をいただく折など特にお世話になっております。復職の際、“日常生活可”と“通常勤務可”の間には「階段」が発生してしまうことも多く、本人が可能な範囲の努力と職場側の配慮、両者が必要となるケースがあります。

本人や企業の産業医、人事部からの問い合わせ(この場合は本人同意要)にて、就労上の配慮事項に対し各専門分野の先生にご意見を仰ぐ機会があるかと思えます。その際には本人の状態に加えて、これまでの労働条件・得られる職場側配慮の有無を加味し、先生方の貴重なご意見を賜ることができたら幸いです。

今後ともご指導・鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



強化合宿(産業医大教授らと)



製造業で実施した
CPR AED講習



林業職場巡視



「てんかん専門医の 診察室から」 を出版しました。



田中神経クリニック 田中 正樹 (医2期)

高校生・看護学生・福祉支援者・医学生にもわかるようなてんかんの解説書を、2017年8月15日に出版しました(Amazonで購入できます)。わかり易さを追求するために、毎日、私の診察で行っている患者さんとの対話(問診の様子)を書き込みました。

てんかんの患者さんを診療している小児科・精神科・神経内科の先生方の参考になれば幸いです。

私の本を簡単に紹介させていただきます。

序章

私の略歴は、57年に滋賀医科大学を卒業、滋賀医科大学小児科教室で研修(1年間)、びわこ学園小児科に勤務(4年間)、名古屋大学精神科で研修(1年間)、静岡てんかん神経医療センターに勤務(20年間)。2007年7月17日に横浜市栄区にてんかん専門クリニックを開設して10年が経過しました。

クリニックのてんかん専門医は私一人ですが、てんかん診療の研修にきている先生が一人います。

1章 ■ 倒れる発作も倒れない発作もあります。

一部の発作を除き、発作は1分以内で終わります。診療する医師は、短い症状を把握するために、患者さんや患者さんの発作を目撃した人から、発作に関する情報を集める技量が必要で

す。そのためには、典型的な発作の辞書を持つ必要があります。多彩な発作を、患者さんや家族の陳述を中心にして説明しました。

問診は、患者さんの発作を、部分発作と全般発作に分けて治療するための糸口になります。

2章 ■ 脳波検査・てんかん診断

発作に関する情報を、脳波検査の結果と照らし合わせて、発作型(発作の種類のことです)を判定して治療につなげます。てんかん臨床における脳波の判定は決して難しいものではありません。てんかん専門医にとっては、典型的な全般あるいは部分てんかんの脳波を数多く判読する経験が一番大切です。

3章 ■ てんかん診断

発作の型を判定したうえで、てんかんを大きく4つに分けます。特発性部分てんかん、特発性全般てんかん、症候性部分てんかん、症候性全般てんかん

に分けます。それぞれのてんかんを持つ患者さんに登場していただいて、問診の紹介と脳波の説明だけにとどまらず、患者さんの生活や福祉制度についても説明しました。以下に患者さんとの問診の始まりを少しだけ引用させていただきます。

診察室での対話(発作の内容を確認)

結子さん/てんかん発作は止まらないのですか。近くの病院の先生が薬を増やしてくれただけで発作が止まらないので、これでは就職しても続かないのではと思って、落ち込みます。

田中/発作のときの結子さんの様子を知ることが、発作の治療を進めるうえで大切です。結子さん、発作がおきた時のことを覚えていますか?

結子さん/先週の土曜日の発作は、夕食を食べたあと、お風呂場に行ったところまで覚えています。そのあと気付いたときは救急車の中でした。

上記のような対話に加えて、内容の理解を容易にするために、プロフェシ

ナルのイラストレーターの吉野晃希男さんにイラストを描いてもらいました。呼びかけも反応がない状態を描いて欲しいと注文したところ、右図のような絵が届きました。



3章では意識が曇る発作(複雑部分発作)が止まらないために、日常生活に困難を抱えている患者さんについても紹介しました。電車の中で発作になったために、電車の中にカバンを置き忘れた患者さんや、調理中に複雑部分発作になったために出来上がった料理を無駄にしてしまった患者さんにも登場していただきました。さらに、発作が止まらない患者さんが、どのような心情を抱えているのかについても記載させていただきました。

4章 ■ 電話相談

当院の患者さんの多くは90日間隔で受診しています。その間に何かあれば、電話で私に相談が入ります。電話相談についても一部を引用して紹介します。

駅に向かう車の中で発作。いまから新幹線に乗って修学旅行に行きたい

20XX年6月某日午前9時40分。有美さん(14歳中学生)の父親から電話がありました。

父/田中先生、今朝7時ごろ、有美が新横浜に向かう車の中で、いつもの大きな発作(強直間代発作)になりました。発作後に眠って、8時過ぎに目覚め、有美は、修学旅行に行きたいと言っているのですが、行けるでしょうか。発作があったので私としては心配です。

田中/けがはないですか。いまはしっかりしゃべれていますか？

父/けがはしていません。本人は修学旅行に行きたいと、はっきりと言っています。

田中/歩けますか？

父/歩くのも、大丈夫です。学校の先生は、主治医がOKならば参加可能であると言っています。同級生のみんはすでに京都に出発しました。

田中/修学旅行に参加しましょう。ただし家族が京都まで付き添ってください。京都で、学校の先生に本人を預けるときに、元気していれば、OKとしましょう。

父/では私が、京都まで付き添って、先生に有美を預けるようにします。

田中/そうしてください。大きな発作のあとに、落ち着きがなくなることもあるので、お父さんが京都まで付き添ってください。

5章では、**妊娠と出産について**、6章では、**てんかん治療の進歩と交通事故と運転免許について**記載しました。

5章を読んでいただければ、てんかんの患者さんの多くが、元気な赤ちゃんを産んでいることが分かります。また、抗てんかん薬の催奇性についても記載しました。6章には、てんかんの患者さんの多くが事故を起こすことなく運転していることを記載すると同時に、私のクリニックに通う患者さんの中で交通事故を起こした方についても記載しました。

7章 ■ てんかん診療 Q and A

この章では、患者さんからいただいた質問に答えています。質問をいくつか列記すると、

Q: 症状がてんかんと似ているために、てんかんと間違えられる病

気がありますか？

Q: 部分発作には全般発作の薬は効かない？

Q: てんかんと言われたけど薬を服用したくない。どうしたいですか？

Q: てんかん専門医は少ないのでは？

Q: 小児のてんかんは小児科の先生がみてくれますか？

などです。

回答については本書を読んでください。よろしく願います。

あとがきかえて

てんかんという病名について私の意見を記載させていただきました。

てんかんは漢字で表記すると、癲癇となります。癲は辞書を引くと、1:気が狂う。「瘋癲」2:病気の名。「癲癇」と説明されています。一方、癇は、①神経が過敏で、小さなことにもいら立ったり怒ったりすること。と記載されていますが、この記載は、てんかん専門医からすると、違和感を覚えます。

てんかんは、臨床医の詳細な発作の観察と脳波の進歩によって、「大脳の過剰発射によっておきる慢性反復性の発作である」ことが、医学的に明らかにされてきました。てんかんがある人は、気が狂っているとか、イライラしていると考えるのは間違いです。

私は病名を変更する必要性を感じています。そのことがてんかんに対する偏見をなくし、てんかんがある患者さんの理解につながると考えます。大脳の神経細胞の過剰発射が病態の本質であり、またいろんなてんかんがあることを表記するためにも「神経発射症候群」あたりが妥当と考えています。

支部会

初めての関東支部会

琉球大学大学院医学研究科
先進ゲノム検査医学講座

教授 前田 士郎 (医5期)

横浜に13年少々滞在し、3年前に沖縄、琉球大学に赴任いたしました。横浜在住時には1回も参加していなかったにも拘らず、今回お声をかけていただき初めて関東支部会に参加させていただきました。私の専門の「ゲノム研究」を好き勝手にお話しし、何のことかよくわからないと思われたかもしれないのですが暖かく迎えていただき大変感謝しております。来年はエンターテイメントに徹する会にされるとの事で、加藤正二郎先生の落語や下田先生のロック演奏等が予定されているそうですので皆様ふるってご参加していただければと思います。私も参加させていただけるとのことでしたので楽しみにしております。今回はホテルの改修でオフィシャルな2次会は行われなかったのですが渡辺一良先輩には夜遅くまでおつきあいいただき本当にありがとうございました。本当に愉しかったです。沖縄にお越しの際には是非お声をかけていただければと思います。それでは関東支部会の益々のご発展をお祈りいたします。



栃木県南健康福祉センター

参事兼所長 大橋 俊子 (医4期)

異なるのでは」等の興味深い講話をしていただき、その後の懇親の場では近況を含め様々な話で盛り上がりました。また翌日曜日には恒例となっている若洲ゴルフリンクスでのゴルフコンペに8名参加し、比較的涼やかな天候のなか和気藹々なゴルフを楽しみました。

関東支部会は医学部1期生が卒業した年から関東会として夏に開催し、関東地方を中心として活躍している先輩から現場の話が聴ける場(当時は20~30名位は関東方面から滋賀医大に入学していました)として、また大学時代に教わった先生をお招きして学生に戻ったように講義?

平成29年8月19日土曜日に品川プリンスホテルで湖医会・関東支部会が開催されました。例年より少ない渡辺同窓会長を含めた卒業生20名と学生3名の参加を得、5期生の前田士郎琉球大学大学院医学研究科先進ゲノム検査医学講座教授から、『ヒトゲノム研究の生活習慣病対策への応用』という最新の話題とともに「宮古島の人のゲノム配列が異なるので琉球諸島とはルーツは

をお聞きする場となっていましたが、関東方面からの学生が少なくなると一時休止し、看護学科の卒業生を含め関東支部会として再始動となりました。平成30年は関東支部会20周年となります。そこで平成30年8月(概ね第3土曜日)は記念の会として、2期生の加藤正二郎先生(佐野で開業)による落語と下田和孝獨協医大精神神経医学講座主任教授によるロックバンド演奏という趣向を凝らした内容を予定しています。すでに同窓会からお知らせがあったかと思いますが、出演(?)を受け付けますのでどしどし応募してください。また関東支部会に普段は参加されない卒業生の皆様の参加をお待ちしております。

関東支部



情報通信医学研究所

中川 晋一 (医8期)

恒例の関東支部会が8月19日、品川のホテルで開催されました。関東一円で活動する関係者は開業医から大学教員まで多彩です。諸先輩や後輩諸君と会い情報交換と交流をもつことは母校から離れた地で活動する我々の大きな支えになっています。今年は医学部5期生の中

山先生のコーディネートで同期の琉球大学大学院 医学研究科 先進ゲノム検査医学講座 教授前田士郎先生に『ヒトゲノム研究の生活習慣病対策への応用～沖縄バイオインフォメーションバンク構想～』について御講演いただきました。最先端のゲノム解析による副作用リスクの事前検知によるオーダーメイド医療の現状と沖縄諸島の島嶼における解析から各種生活習慣病の修飾因子検出を目的とした「沖縄バイオインフォメーションバンク」を推進されるとのこと。

来年は関東支部設立20周年。幹事の河崎先生によれば「獨協医大下田教授によるライブと二期生 加藤先生の落語」とのこと。奮って御参加ください!

関東支部会に参加して



帯津 裕一
(医学科2年)



坂井 有里枝
(医学科4年)

関東支部会へは初めて参加させていただきました。会場が品川のホテルということもあり、緊張の中お伺いさせていただきましたら、既に多くの先生方が和やかに談笑されていて、その雰囲気のおかげで私の緊張も幾分和らぎました。

琉球大学先進ゲノム検査医学講座教授の前田士郎先生のご講演から始まり、立食パーティーへとという流れでした。その中で様々なフィールドにおける先輩方のご活躍を拝聴し、医師として取り組める分野の多様さや働き方の幅の広さに改めて気づくことができ、目の前に広がる可能性に胸を踊らせました。医師としての活躍について伺う機会は多くありますが、所属大学の先輩方のそれを直接伺うというのは一味違ったもので、将来に悩む私は大変勇気付けられました。温かいアドバイスをくださった先輩方に心よりお礼を申し上げます。

来年は第20回という節目の年になると伺っております。来年もまた参加させていただきたく思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

来年は第20回という節目の年になると伺っております。来年もまた参加させていただきたく思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

先日行われました湖医会関東支部会19回会合に参加させていただきました。誠にありがとうございます。学内にいるとどうしても交流が学生同士の横方向になりがちで、また滋賀医が東日本から遠くはなれており関東の情報がなかなか入ってこない中、いまま最前線で活躍されている滋賀医OB・OGから関東の医療現場の生情報を多く伺うことができました。また、ご講演されました琉球大学前田教授を始め医師として働くことのキャリア設計は自由度が高く、それだけに打ち込みがいのある仕事であることを実感いたしました。まずは定期試験や国試の「お勉強」を早々に仕上げ、より多くの方々のお話を伺うとともに専門性を高めていきたいと思いました。

繰り返しになりますが今回このような好機を与えてくださいました湖医会関東支部と当日暖かく迎えてくださった諸大先生方に最大限の謝辞を申し上げます。



熱田 桃佳 (医学科4年)

関東支部会では普段の大学ではあまりお会いできない、関東にご勤務されているOB・OGさんからお話を伺うことができ、大変有意義な時間でした。また次の機会がありましたら是非参加させていただきたいです。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

支部会

滋賀支部

第3回滋賀支部会

平成29年8月27日(日)、ホテルポストプラザ草津において、第3回滋賀支部会が開催されました。今回は医学科、看護学科の学生さんも参加してくれました。第1部は、山田尚登滋賀医大副学長(医2期)から、「滋賀医大の教育の現状」について、津田知子滋賀医大助教(看1期)、山下 敬同助教(看5期)から、「看護学科卒業生の動向」について、それぞれご講演いただき、活発な意見交換がありました。第2部の懇親会では、参加の皆さんから近況が報告され大変盛り上がりしました。

この支部会に先立って、卒業会員の県内病院長懇談会が開催され、7名の病院長のほか山田副学長をまじえ、滋賀県下の関連病院の連携をいかに強めるか、などについて議論されました。次回からは、8月の最終日曜日に開催されます。お誘い合わせのうえご参加ください。



滋賀支部会に参加して



北村 拓
(医学科2年)

この度は滋賀支部会に参加させていただきましてありがとうございました。前半の講演では、滋賀医大の教育カリキュラムを「授ける側の視点」で山田副学長がご説明くださり、身の引き締まる思いがいたしました。津田先生、山下先生による看護学科卒業生動向のお話は、普段あまり接する機会のない看護学科の実際を知ることができ、大変興味深かったです。

後半の懇親会では、医療の実際から学生生活の失敗談に至るまで多岐にわたるお話をお伺いし、楽しく充実した時間を過ごさせていただきました。個々の先生方の魅力もさることながら、会場全体が明るく朗らかな雰囲気にもまれていたように感じられ、改めて滋賀医大の一員となれたことを嬉しく思いました。次回以降も是非参加させていただきたく存じます。

井上 愛美
(医学科2年)



この度、湖医会の支部会に初めて参加させていただきました。滋賀医科大学の教育の現状や、看護科卒業生の動向に関する講演を拝聴しまして、先生方が学生、卒業生のために尽力して下さっていることがとても伝わってきました。滋賀医科大学の一学生として、先生方のご尽力に応えるべく、医学の勉強に励もうと思いました。

先生方との懇談会では、医師としての顔から離れ、和気藹々とした滋賀医大生の一面を感じることができました。卒業生の先生方とこのようにお話させていただける機会はありませんので、医療で活躍なさっている先生方との懇談会はとても貴重な経験となりました。より多くの学生さんに、支部会に参加されることをお勧めしたいと思います。この度は、第3回支部会に参加させていただきまして、ありがとうございました。

守山会(医1期)開催される

医学科1期生による守山会が、2017年9月17日(日)14時から銀座敦煌で開催されました。27名の参加があり大いに盛り上がりしました。



西医体レポート

1

バドミントン部

主将 畑 俊嘉 (医学科4年)
女子主将 洲崎ゆう (医学科4年)

勝利の背景 山口県、周南市総合スポーツセンター、光市総合体育館の二会場にわたって行われたバドミントン部の西医体は今年も熱かった。計30名の医学科の部員が出場し、女子シングルスでは石原が準優勝した。男子団体は初戦で川崎医科大学とあたり、敗退した。あたりがそれほど良くなく、団体メンバーは手に汗握る試合を行ったが、惜しくも負けてしまった。女子団体は、二回戦で福井とあたり敗退し、去年のような晴れ晴れしい結果を残すことができなかった。女子団体戦の際、石原が相手のルーキーとあたり惜しくも負けてしまったが、録画していたビデオを見て相手の弱点・自身の反省点を踏まえ、個人戦で同じ相手に勝ち切った。石原の前の試合を次に生かすことができたのも尊敬すべきところだが、前の試合を録画した部員、より一層応援した部員のカモあってこそだと考える。上回生のみならず初心者初めの一年生も良い結果を残した。特に村田が初心者ながら三回戦まで進出したのは凄いことである。村田の努力もあるが、試合間の先輩たちのアドバイスもその背景にはある。部員全員がお互いよい形で影響しあって、チームとしてまとまったと感じる大会であったように思える。

大会終了後、ミーティングを行い、各自の課題を話し合った。それだけでなく、部活としてもっとこうするべきではないかという話も出た。それらをふまえ、またこれからの練習、その先の大会へと生かしていきたい。



女子テニス部

前主将 田埜郁実 (医学科4年)



本年度は、山口県において西日本医科学生総合体育大会テニス部門(以下、西医体)が行われ、テニス部医学科男子は1回戦敗退、医学科女子は1回戦敗退という結果となりました。また滋賀医科大学の主管により西日本コメディカルテニス大会(以下、西コメ)が行われ、看護学科女子は第3位となりました。

西医体、西コメは滋賀医科大学テニス部にとって最大の大会であり、半年間かけて準備を進めてきました。昨年度とは選手の顔ぶれもがらりと変わり、人数は少ないながらも個性の光る新しい雰囲気でした。今のチームには何が足りないか、必要な練習はどんなものか、などを部員で意見を出し合えたおかげで納得のいく練習にすることができました。

今大会は男女とも特に人数が少ない中での試合進行でした。1人1人が自分の役割をきっちりと認識して常に総動員で動く必要があり大変ではありましたが、大会を経てチームの結束力を改めて感じましたし皆が一段と成長できたのではないかと思います。結果としては悔しい思いも多く残ります。しかし、それを飛躍力にして次に生かしていく地盤ができつつあるのではないかと感じています。私自身、一年間主将として部活に関わらせていただき非常に良い経験や思い出を得ることができました。これからも後輩達の健闘を祈り、支えていきたいと思えます。

サッカー部

前主将 島田ゆうじ (医学科4年)
今年の西医体は山口県下関市の乃木浜運動公園と小野田市のおのだサッカー交流公園にて8月8日より

6日間にわたって行われました。滋賀医科大学サッカー部は抽選の結果一回戦はシードとなり8月9日に乃木浜総合公園にて愛媛大学医学部と対戦しました。試合前半は内容的にこちらが押しながらも決定的な場面を作りきれずに相手に先制点を許してしまいました。その後もコーナーキックから追加点を許し、前半を0-2で折り返しました。後半は逆転を目指し意気込むも3失点を喫し、それ以降勢いに乗った相手にさらに追加点を許してしま



した。終わってみると0-5という大差をつけられ、初戦敗退という結果となってしまいました。

6回生は西医体を最後に引退し9月から新幹部のもと新たなチームが始動しました。ここ数年サッカー部としては西医体の一回戦の壁が高く初戦敗退という残念な結果が続いています。来年こそは初戦を突破し、良い結果が残せるよう部員一同団結して大会で勝ちあがる強いチームを作り上げていきたいと思っています。OB・OGの皆様には昨シーズンも多大なご支援とご協力をいただき誠にありがとうございます。今シーズンはより一層精進してまいりますのでご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

空手道部 横井晴華 (看護学科3年)

8月11日、8月12日、8月13日に、山口県立下関武道館にて西日本医科学生総合体育大会空手道部門、西日本コメディカル学生空手道大会が開催されました。

大会結果としては、男子新人戦でベスト16位に入賞いたしました。

た。大会の他、試合に向けての練習や現地での団体行動を通して部の結束が固まったように思います。

今後も部員一同努力し、空手道部を盛り上げていこう精進してまいります。OB・OGの皆様におかれましては、これからもご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひいたします。

西医体レポート

2

男子バスケットボール部

高田直哉 (医学科4年)

今年の西医体は8月15日から山口大学主幹のもと執り行われた。1回戦の相手は高知大学、序盤相手のシュートが入り競る展開となったが、徐々にこちらの調子が出て最後はファールゲームを誘い快勝。2回戦の相手は第1シードの山口大学、3連覇中のチームであり3ヶ月照準を合わせてきた相手だった。序盤はなんとか食らいついても結局要所で力を出し切れず完敗。点差が開いてからはオールコートで果敢なディフェンスをしたが点差を締め切ることができなかった。この山口大が3回戦で負け、部員たちにはさらに悔しさが残る結果となったが、この思いは秋以降の新チームに託したいと思う。

西医体は1年間の集大成が問われる特別な大会で、部員たちの思

いが最も現れ、大会を通して様々な面で個人・チームとして成長する絶好の機会のように思う。部活が勉学に悪影響を与えているという意見もあるが、2017年度滋賀医大は西医体全部活の総合成績が最下位だという、悲しい。部活に代わる個人的に熱中できる活動も含めて、大学全体で「勉強も部活も頑張っていこう」というような流れが起きて、両者の好循環のもと、学生生活が送ることができれば、国試合格率100%という悲願を再び達成できるかもしれない。

最後になりましたが、ご指導ご支援いただいております松浦教授、OB生や引退生、そしてホテル青山の婆やに厚く御礼申し上げます。来シーズンもより一層精進いたしますので今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

端艇部

榎本啓希 (医学科4年)

4度目の西医体が終わりました。結果は総合6位というなんともやるせないものでした。一回生の天竜に始まり、琵琶湖、米子を経て今年は熊本で試合でした。1回生の頃から非常に多くの時間をボート部で過ごしてきました。その時間を結果で取り戻すことができなかつたのは非常に悔やまれることです。なにより様々な応援、援助をして下さった、OBの先生方、先輩、後輩に申し訳なく思います。辛かった思いは後から振り返るといい思い出になる、等しいですが今はまだそのように感じることはできません。今はただただ主将の任を終えたという安堵感しかありません。ボート部は部員が年々減少し非常に苦しい時期を迎えています。この状態が続くようでは西医体で結果を残すことも段々難しくなっていってしまうのは間違いありません。それを阻止すべく、僕らの代での新歓がうまく行かなかったことの反省を踏まえて、新歓を積極的にサポート出来れば、と思っています。これが、今僕が考えるボート部への還元の仕事です。4年間どうもありがとうございました。

ヨット部

前主将 大野純生 (医学科4年)

OB・OGの皆様、はじめまして。私は、前年度滋賀医科大学ヨット部で主将を務めさせていただいております。まず8月に行われました西医体の結果報告をさせていただきます。470級は4位入賞、スナイブ級は9位、総合6位という結果となりました。

この西医体の遠征におきましては、多くのOBの先生方から援助をいただき、OB会からはセールとコーチングのご支援をいただきました。本当に感謝しております。ありがとうございました。また、これだけのご支援をいただいております。十分な結果を残すことができません。申し訳ありません。

引退させていただいた自分たちのこれからの義務は、次の代を支



ることです。自分たちの過ごしてきた一年間は、多くの甘さや誤りがあったと思います。その甘さや誤りがこの結果となったと思っております。それらを反省し、同じ過ちを後輩がしないよう、そして後輩たちがそれぞれの目標を達成できるよう、精一杯指導していきたいと思っております。

この一年間、私たちは様々な形でOBの先輩方に支えていただきました。引退することができたのも、支えてくださった先生方のおかげです。重ね重ね御礼を申し上げます。

最後になりましたが、これからもこの滋賀医科大学ヨット部をよろしく願いたします。

女子バレーボール部

平林 歩 (医学科4年)



私達女子バレーボール部は、今年度から医学科も看護学科も学部に関係なく出場できる大会を作ろうという趣旨のもと、滋賀医科大学で第1回西コメを開催させていただきました。

今回の西コメでは、リーグ戦を行ったあとにトーナメント戦を行いました。

リーグ戦の結果は、和歌山医科大学に25-16で勝利、岐阜大学に18-25で惜敗、奈良医科大学看護に12-25で惜敗しました。リーグ戦の結果を元に行われたトーナメント戦では、近畿大学に1-2 (23-25、25-22、9-15) で惜敗、和歌山医科大学に2-1 (14-25、25-16、15-11) で勝利しました。

チームが一つになり、最後まで粘りあるバレーをできたと思います。応援に駆けつけてくださった皆様方、ありがとうございました。今後、チームがさらなる活躍出来るよう、日々精進したいと思います。



西医体レポート

3

陸上部 主将 大沼玲佳(医学科4年)

2017年8月19日～20日の二日間にわたって、山口県の維新百年記念公園陸上競技場にて行われました、西医体の結果をお知らせいたします。

- 男子100m…赤田 将／準決勝進出
- 男子200m…赤田 将／準決勝進出
- 男子800m…池田 那祥／7位
- 男子走高跳…馬場 達也／5位
- 女子100m…中村 優月／準決勝進出
- 女子ハンマー投…大沼 玲佳／優勝



国体や日本選手権を開催するような環境・設備の整った競技場で、天候にも恵まれた中で競技を行うことができ、部員一同にとって非常に良い経験となりました。

前述のような結果を残した選手もいれば、惜しくも決勝を逃した選手、または自己記録を更新した選手、できなかった選手、そして故障のため出場できなかった選手もあり、様々な思いをする結果となりました。しかし、特に今回は男子100mと男子走高跳で歴代記録2

位を更新し、好記録を残すことができました。

陸上競技では選手それぞれ目標を持つことが、練習や大会へのモチベーションの維持に必要不可欠であり、それが必ず結果に繋がってくる、と考えます。その目標設定のために、今シーズンから『滋賀医大陸上競技部歴代記録』を作成しました(HPに掲載しております)。このようにOB・OGの先輩方などという身近な目標を改めて明らかにさせることで、部員達に良い意識付けができたのだと思います。

今シーズンの嬉しさや悔しさを胸に、来年度はより良い結果を報告できるようこれからも部員一同精進して参りますので、更なるご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



水泳部 主将 古田 諒(医学科4年)

水泳部門は、西医体は沖縄で、続く西コメは山口で大会を行いました。部員一同、プレーヤーマネージャーを含め、この大会のために1年間練習してきたといっても過言ではありません。また、我々水泳部は2年前の大阪開催の西医体で総合優勝も果たしており、その優勝を経験している部員は少なくはなりませんが、それでも少し王者のプライドをもって挑んだ部員もいたかと思えますし、主将である自分も他の大学には負けるものかと思ひ挑みました。しかし、結果としては西医体、西コメともに個人メダル1枚のみに終わり、全体としても満足のいくタイムを出す事ができた部員は多くはなかったように思います。沖縄で屋外という過酷な環境下の中ではありましたが、やはり上位層は環境をもろともせず、結果を出してきました。近年、西医体、西コメともにレベルが格段に上がってきており、今まで通りの取り組み方ではなかなか太刀打ちできなくなってきました。もう一度黄金時代を取り戻すためにも、これからを担う部員にはぜひ期待したいですし、現役を引退にはなりますが、私自身も部に貢献できるよう、取り組んでいきたいと考えております。

これからも水泳部にご指導、ご声援のほど、よろしくお願い申し上げます。



合気道部 主将 北川由華(医学科4年)

平素よりお世話になっております。滋賀医科大学合気道部です。8月14日から16日にかけて、福岡県博多体育館にて、2017年度西医体・西医療体が行われました。1年生から6年生まで、合わせて18名参加いたしました。合気道部では二人又は三人が組になり、大会にて演武を披露します。後輩から直接先輩へお願いすることで組を決めております。しかし、大会の前の週末で、上回生は実習であったため、積極的に空き時間を見つけ、先輩後輩で協力し、稽古を行いました。西医体の練習では、先輩後輩が一对一で組となるため、普段以上に先輩から後輩への指導がしっかりと行われ、各自の技の上達に繋がりました。その上、他の部員が客観的な目線から、演武のアドバイスをすることで、各々の技の癖を理解し、修正するよう努めました。その成果が大会にて十分に発揮されたのではないかと思います。また大会後は福岡の観光ということで、太宰府へ向かいました。天候にも恵まれ、部員皆で多くの思い出を作ることができました。

来年度の西医体は富山県で行われる予定です。各自が昇段・昇級し、レベルアップして、また次の西医体を迎えられるよう、努力して参りたいと思います。これからも滋賀医科大学合気道部をよろしく願います。



湖医会広報担当に就任して



滋賀医科大学 生化学・分子生物学講座再生修復医学部門
准教授 寺島 智也(医16期)

湖医会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。昨年11月より、常任幹事広報を担当させていただくことになりました医学科16期生の寺島智也です。卒後から現在までの3分の2ほどの期間、滋賀医科大学に勤務させていただいております。私は、内科に入局後、神経内科医となり、3年前に現職に学内移動し、再生医療、先端医科学などに携わっております。

これまでに湖医会の仕事に携わる機会はあまりありませんでしたが、学内では基礎医学講座、臨床医学講座、附属病院、学外では市中病院、研究留学を経験しておりますので、それらを生かして、皆さんの「知りたい情報」「伝えたい情報」の発信をはじめ、興味や親しみを持ってもらえるような発信源（webサイト、ホームページなど）の充実を図っていききたいと思います。

卒業生をはじめ、湖医会会員の皆様を“つなぐ”広報活動を進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



滋賀医科大学 糖尿病内分泌内科
学内講師 森野勝太郎(医16期)

卒後20周年の同窓会に参加して、月日の流れの速さを実感するとともに、同級生の様々な世界での活躍や、価値観に関する多様な意見を聞いたことに感謝していました。そんな中、永田会長より湖医会での広報担当へのお誘いがあり、これまで湖医会に受け身にしか参加してこなかった自分に何ができるのかとの思いがありながらも、滋賀医大に残っている人間として何かできるのではないかとのお思いでお受けすることにしました。

滋賀医大卒業生が5000名を超える中、私たち卒業生同士のネットワークを強化することで、仕事や生活が上手く回りやすくなることもあるのではないかと考えています。まずは、湖医会が、卒業生が、どのような活動をしているのかを知っていただくコンテンツを充実させつつ、滋賀医大卒業ではないものの、研修医や看護師、職員として滋賀医大に関わっている方々にとって役立つ湖医会になるよう、私なりに貢献したいと思います。

訃報 謹んで哀悼の意を表します。

(特別会員)

●平成30年1月29日 古村 節男先生 (元法医学講座教授)

餅つき大会を 共催

平成29年12月15日(金)17:30～福利棟の食堂ホールで、生協との共催で餅つき大会を開催しました。相見良成湖医会副会長のあいさつではじまり、学生、教員が交代で餅をつき、150余名の参加者にはつきたてのもちを振舞いました。マレーシアからの研究生の参加もあって賑やかな餅つきになりました。今回の企画に併せ、湖医会から臼と杵を新調し寄贈しました。



2017年度「湖医会」総会 議事録

日時／平成29年10月28日(土) 14:30~16:20

場所／看護学科棟第4講義室

議題

1. 2016年度事業報告及び決算について

原案(資料1-1、1-2)のとおり承認された。

2. 2017年度事業計画及び予算について

事業計画については原案(資料2-1)のとおり承認された。

予算については、原案(資料2-2)を一部修正のうえ承認された。

3. 会則の一部改正について

原案(資料3)のとおり承認された。

4. 役員の変更について

選挙管理委員長から、公示の結果立候補者はなかった旨の報告があった。

幹事会から提出のあった候補者名簿(資料4-1)のとおり、また幹事については資料4-2のとおり新役員が承認された。

(任期は3年 2017.11.1~2020.10.31)

新役員

会長／永田 啓

副会長／蔦本尚慶・相見良成・金子 均

監事／来見良誠・向所賢一

幹事／全て再任

永田次期会長から、あいさつがあり、これからの湖医会の組織(方向性)(資料4-3)についての説明があった。

5. その他

幹事会の報告

①功労者表彰規程の制定について

②名誉会長の称号授与について

③顧問の委嘱について

※ 各資料は「湖医会」HPを参照

年会費について

医学科卒業会員・特別会員・賛助会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

医学科卒業会員

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の
自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。
なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は
事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になっ
た場合は、メールまたはファクスで事務局
までご連絡ください。



表紙の写真：中庭から一般教養棟・基礎研究棟(撮影：学生写真部)